〔駒沢女子大学　研究紀要　第３号　Ｐ.35～44　1996〕

エリザベス・シダル考
～伝説と真実との狭間で（１）～

藤　田　啓　子

Consideration of Elizabeth Siddal　～Between the legend and the fact (1)～

FUJITA Keiko

初めに

エリザベス・シダル[1]、通称リジー、あるいはグッガム、ザ・シド、アイダ、と様々な愛称で知られる彼女は、ダンテ・ゲブリエル・ロセッティが語られる時、絶えず伝説的な女性として取り上げられてきた。それ故に、彼女について私たちは非常に多くのことを知っていると思いがちである。しかし、実際は、ほとんどロセッティによって創られたシダル像、彼の詩に詠われた、祝福されし乙女として、あるいはつれなき乙女として、また彼の絵に描かれた永遠のベアトリーチェ、オフィーリアとして、そしてフランチェスカとしての仮象に過ぎない[2]。彼女自身のことについては、彼女の言葉も考えもほとんど伝えられていないのである。

彼女は、今日においてさえ、ロセッティとの関わり合いのなかでのみ現れる。しかし、彼女は、ロセッティの作品の中でのみ輝やくような女性でしかなかったのであろうか。本稿では、限りなくロセッティに影響を与えたシダルという女性の個人としての特質を探るために、まずその第一段階として、彼女に関する諸説を比較しながら、ロセッティと出会う1850年前後までの彼女本来の姿を見出すことにしたい。

第１章　シダルの側から

まず最初にシダルの生年からにして問題が認められる。というのは、長いこと1834年説[3]が信じられてきたし、現在でも多くの研究者は1834年説を採っているからである。しかも、彼女の出自についても必ずしも定説をみない[4]し、有名なデヴァレルによる〝発見〟の時期やロセッティとの出会いの時期ですら、確定してはいないほどなのである。従って現在においても、彼女についての事象の多くは、錯綜している。というのも、私たちは、ロセッティの書簡や彼を語る仲間たちの記録のなかに彼女の姿を垣間みるだけであって、そこに当然のように含まれる様々な噂、憶測といった不確かな情報に振り回されがちだからである。これから述べる彼女の出自についても、矛盾する様々な証言のなかから、ほぼ一致するものを取り上げたに過ぎないことをあらかじめ述べておきたい。

第１節家系と生い立ち

現在明らかになっている限りでのシダル家は、ダンテ・ゲブリエルの弟、ウィリアム・マイケル・ロセッティによって語られ、以降多くのロセッティ関係資料によって定説となった感のある、極めて貧しい階級と指摘される[5]ほどには低下層でないと思われる。シダルの祖父は、1783年に刃物鋏職人の徒弟になっているが、先祖は南ヨークシャーの職人階級であったと措定される。というのも、シダル（Siddall）という姓は、

南ヨークシャーではごくありふれた姓だからである。いずれにしても、彼女の父親チャールズ・シダル(Charles Siddall) は、1800年頃にシェフィールドに生まれ、父親の職業を継いで刃物師となった。やがて、ロンドンに出て、1824年12月13日にエリザベス・エリナ・エヴァンス (Elizabeth Eleanor Evans) と結婚している。

このように父親側の家系は、わずかながらも辿ることができる。しかし母親側の方は、プチブルジョワ階級を祖先にもつという説があるだけで、確かなことは皆目判っていない。のみならず、彼女自身の記録でさえロンドン生まれと記載されているだけで、まったくと言ってよいほど残されていない。ほとんど唯一判っているのは、彼女の孫娘の記録で、祖母が元家政婦であったという噂に対して、「私の祖母についての思い出では、彼女が家事についてほんの初歩的なことでさえ知らなかった[6]」として、この噂を否定した、と伝えられていることである。

このシダル家に、1825年長女アン(Ann)が誕生する。この長女が生まれた頃に、夫妻はシェフィールドに移り、1827年頃の長男チャールズ (Charles) 誕生直後に、再びロンドンに戻って、ホーバンのハットン・ガーデン外れのチャールズ街で暮らしている。1831年には三女リディア(Lydia)が生まれ、その後テームズ河の南方へと移り、1832年の住所氏名録には父親チャールズは、ストランドのチャールズ街7番地とセシール街13番地で「シェフィールド問屋」を経営する金物小売商として記録された。1833年には、サウスウォークで四女マリー (Mary)、1836年に五女クレア (Clare) が誕生。さらにバーモンジィに移り、1838年には次男ジェームズ (James) が誕生。1842年に誕生した三男ヘンリー (Henry) の誕生地は、ブラックファイヤーズ、と住まいを次々と変え、しかも、彼が生まれた時にはオールド・ケント街にも店を拡げている。1849年まで一家は、ケント・プレイス8番地で生活していた。従って、シダル家は、三男五女の8人の子宝に恵まれたことになる[7]。

いずれにしても、問題のシダルは、この家の二女として1829年7月25日に誕生し、母親の名前を継いでエリザベス・エリナという名前をつけられた。1歳の時に、セント・アンドリューズ教区教会で洗礼を受けたが、その時の洗礼記録では父親の仕事は、金物商となっている。こうしてみるとシダル家の水準は決して低下層ではない。どちらかと言えば、中産階級に属する。しかし、子どもが多かっただけ、なにかと物入りも多く、当時のイギリスで有産階級と労働者階級を分ける決定的な要因とされた使用人は、使うことができなかった[8]。このことがやがてシダルとロセッティに対する様々の逸話と結びついて、貧しい育ちの哀れな娘と彼女を拾った若く才能ある紳士いう虚像が一人歩きしていったと思われる。

ところで問題のシダルは、はたして無学で無教養な女性であったのだろうか。彼女が子供時代に教育を受けたという記録は現在もまったく見つかっていない。しかし、ラファエル前派の若者たちと出会った時、少なくとも読み書きができたことは確かであり、ウィリアム・ロセッティの、彼女に詩への興味を抱かせたのは、バターの包み紙に印刷されていたテニソンの詩、という記録[9]に拠れば、彼女はこの時既に詩を鑑賞し得るだけの知識を持っていたことになろう。当時の女子教育は上層階級といえども男子と比べると、著しく劣っていたらしい。とすれば、シダルが正式の教育を受けなかったとしても、なんら不思議はない。通常の一般的な女子教育は、教会よって、いわば礼拝に付随するかたちで行われたと考えられているからである。シダル家は格別熱心なキリスト教徒ではなかった[10]としても、教会での礼拝には出席していたことが判明しているので、彼女の勉学も教会を中心になされたと推定される。

第2節　シダルの職業

次に彼女は、何故に婦人帽子屋で働くことになったのか、ということが問題となるだろう[11]。当時、良家の子女は特別な場合を除けば、仕事に就かないものであったので、彼女が仕事に就いていたこと自体、彼女の出自の低さを物語っていると見なされてきた。しかし、彼女自身の記録からは、なにも発見できない。従って、推測の域をでないが、一つには家族が多く、自分の居場所が見出せなかったこと、また小遣い、出来

れば生活費も自分で稼ぎたかったこと、さらに家事は姉妹も多かったので他の者でもできたこと、より良い暮らしに憧れていたこと、しかも、少しばかりであったにしても野心があったことが考えられる。

こうして彼女は、婦人帽子屋に弟子入りしたらしい。らしい、というのは、ラファエル前派の一人であったデヴァレルが、彼女を〝発見〟した時には既に、婦人帽子屋で助手として働いており、はたして何時から、どの婦人帽子屋で修行したものかも判っていないからに他ならない。一般的には、婦人帽子屋の場合、13歳頃に徒弟に入り、最初は新入りとして、やがて見習い職人として五年間ほど修業した後に、助手を経て一人前となっていった。見習い職人となれば、わずかではあっても賃金を貰うことができた。従って、シダルも助手であったので、多少なりとも自分で稼いでいたことになろう。

19世紀中頃のイギリスにおいて、シダルのように女性が労働することは、決して特異な現象ではなかったと思われる。勿論、前述したように有産階級の婦女子は、本質的には仕事には就かなかったが、それ以外の大多数の婦女子は、仕事を求めていた。1841年の記録では、首都ロンドンだけでも20万人の女性就労者がいたとされているが、その中で服飾関係の産業に従事する女性は、イギリス全土で７万人、ロンドンには何と２万人もいるのである。この記録に拠れば、大雑把に見て、ロンドンの女性就労者の10％がアイロンかけ屋、洋服屋及び帽子屋という服飾産業に勤めていた(12)ことになる。

これらの服飾産業のなかでも、婦人帽子屋は流行の、しかも女性の職業としては上位の職種と見られていた。というのも、婦人帽子屋は、帽子のみを扱う職業ではなく、上層階級の女性の服飾のすべてを扱う、いわばトータル・ファッションのディレクターとしての役割を担っていたからである。しかも、当時の婦人帽の流行の中心地は、パリであったので、ロンドンの帽子屋はいち早くパリからの流行を察知して、それを上手に取り入れた者が勝ちを占めた。それだけに他の職業に比べると、浮き沈みも激しかったが、逆に、実力があってしかも運が良ければ、雇われる側から雇う側へと移れる可能性も高かった。そのため、大多数の若い女性にとって、この職業は憧れであった。

一方、男性の側からは、この職業は「不道徳」と見られていた。19世紀中頃から今世紀初頭のロンドンの風景を描写したマンビーの観察に基づけば、「婦人帽子屋階級の道徳は、他のどの階級よりも低い。彼女たちには誘惑物のすべてが揃っており、しかも彼女たちより上の階級にも、また下の階級にもある保護手段は何もない」ので、「ある帽子屋の従業員は、仲間の紳士の友だちが彼女たちに与えた贈り物やカジノに連れていってくれた、という噂に苛立っている(13)」ということになる。

この記述が正しいのか、あるいは誇張に過ぎるのかは、判断しかねるところではある。しかし、シダルが婦人帽子屋という、当時の道徳観念からみると、いささか問題のある職業を選んだこと自体に、彼女の野心的な性格を窺うことができるように思われる。と同時に、彼女が自らのセンスの良さを認識していたことも明白となろう。

第２章　ラファエル前派との関係

それでは、20歳(14)にもなっていて、決して無知ではなく、家庭的には豊かとはいえないまでも、父親と兄とは刃物商を営んでおり、自身も帽子屋の助手という職業を持っていながら、画家のモデルをするという、どう考えても顰蹙を買うような行為に走ったのは、何故なのであろうか。帽子屋を仕事に選んだのが、贈り物を欲したからでも、カジノで遊びたかったからでもなかったように、そこには当然何らかの理由があったに違いない。この画家のモデルという問題を考える上でも、あまりにも名高いデヴァレルによるシダル〝発見〟の出来事を再考してみることにしたい。

第１節　デヴァレル〝発見〟の伝説と真実

ウィリアム・ロセッティの記録によれば、「1849年後半のある日だと思うが、ウォルターは母親にお供し

て、クランボーン横丁にある婦人帽子屋へ行った。そこで彼は、開けっ放しの扉から店の奥の部屋を眺めると、縫い物をしている非常に若い女性を認めた。それが、エリザベス・シダルだった。デヴァレルは、この時シェークスピアの『十二夜』に題材を採って、かなりな規模の絵を制作中であった――その場面はオルシノ公が、小姓の服を着たヴィオラや道化師と一緒に、演奏に耳を傾けているところだった。デヴァレルはヴィオラのモデルを捜していたが、彼の望み通りの乙女がここにいる――そして、実際彼は彼女以上の人を捜すことは出来なかった――ことに、驚いてしまった。そこで、彼は母親に、帽子屋の女主人から彼女の助手が息子のモデルをする許可を得て欲しい、と願った。許可が得られたので、ヴィオラは描かれ、しかもそれは非常にシダル嬢の若い頃の容貌に似ていた。それから直ぐにデヴァレルは、彼女をモデルにもう一点『芽生え』のエッチング用に、ヴィオラを制作した。ロセッティは、この友のために、道化師の顔部分のモデルをしたが、それは多分デヴァレルのアトリエであった。そこで彼は未来の妻と初めて出会ったのだった。(15)」とある。

さらに、ウィリアム・ホルマン・ハントによれば、ハントの家でロセッティと夕食を取っていた時に、「デヴァレルが私たちの平和に満ちた作業を中断させた。彼はほんの少しの間も坐っていられずに、些か不作法な話し方で、部屋のあちこちを行進するように、というよりむしろ踊るようにそして力を込めて止まって、飛び跳ねた時、囁いたのだ。『僕が発見した途方もなく美しい人を君たちに話すことは出来ない。誓って！彼女は女王のように、驚くほど背が高く、麗しい姿で、堂々とした首と最も繊細で完成された容姿、顎からこめかみへの流れるような顔立ちは、まったくフィディアスが刻んだ女神のようだ。ちょっと待って！まだ終わっていない。彼女は灰色の瞳で、髪は輝くような赤銅色、彼女がその髪を波打たせる時、つやつやと輝く。そして今、僕がこの美の化身と出会ったのはどこだったと思う？何故って、僕が母と買い物に出かけた時に、婦人帽子屋の奥の仕事部屋なのさ。女店員が母と何か試みている間、面白いものは何もないので、僕はガラス扉の目隠し越しに、奥の方を覗くと、この思いがけない宝石があったのさ。僕は母に、この奇跡の人が僕のために〈十二夜〉のヴィオラのモデルとなってくれるように説得させた。そして今日、僕は彼女を描こうとしていたところなのだ。でも、初めからへまをやってしまった。彼女は明日、またやって来る。君たち二人で来て、彼女に会ってくれ。彼女は本当に素晴らしい、何故って彼女の友だちは勿論まったく貧しいが、彼女の振る舞いは、常識があり、あたかも淑女のようだ、しかも些かの気取りもなく、誰もが遠慮して近寄らない方法をも完璧に知っている。』(16)」とある。

一方、F.G.スティーヴンズの記述によれば、「1850年の終わり頃、ウォルター・デヴァレルは母親につきそって、クランボーン・ストリートにある当時非常にはやっていた婦人帽子店へ行った。母親と売場主任のやり取りに死ぬほどうんざりしたデヴァレルは、待ちくたびれた子供のような気分で、カウンターをざっと眺めわたしてみたが、その端の店の奥には、最新流行の帽子を巧みに作りあげることに熱心なお針子たちの一団が見えた。その若い娘たちのなかに、美貌が人目をひき、すらりと背が高く、優雅で体つきの見事な娘がいた。娘の銅色の豊かな髪には、さらに黄金に輝く房がまじっており、塔のような首のうえに自然が優美に据えた小さな魅惑的な頭のまわりに、その髪をひっつめにして結いあげていた。蒼白いというよりさらにくすんだ顔色のところどころには、一様に薄い色の斑点が浮かんでいたが、肢体は16世紀イタリアのブロンズ像のように均整のとれた肉づくきをしてた。‥‥彼女の顔立ち、横顔、豊かなとび色の髪は、ラファエル前派の美の理想となった。(17)」とある。

この現在においても有名なデヴァレルによる〝発見〟の出来事(18)によって、シダルは、あたかもシンデレラか、マイ・フェアー・レディのように、ヴィクトリア朝社会の表舞台に登場したことになっていたのである。

ところが、最近になって、シダルの死亡記事から、信じられないような一文が認められたという発表があった。その記録によると、「彼女（シダル）は『暇なときに描いた数点のデッサン』を（ウォルターの父親の）デヴァレル・シニア氏に見せたところ、『彼は、それを大変気に入って』それらの素描を彼の息子とその若い画家仲間たちに示した。その時、彼らは、シダル嬢にもっと訓練するように励ました。彼らはまた、自分た

ちのアトリエに臨時のモデルとして招いた［しかしながら、モデルをすることは、尊敬すべきこととは考えられなかったので、これは死亡記事には記載されてはいない］。そこで彼女は、最初ウォルター・デヴァレルのモデルとなり、次にハントと、有名な〈オフィーリア〉のためにミレーのモデルとなった。1852年末頃に、彼女はロセッティの弟子となり、死亡記事に従えば、彼女自身が『彼女の教師として、ハント氏よりも、ラファエル前派の父、ロセッティ氏を選んだ。』[19]」とある。

もし、この死亡記事が正しければ、デヴァレルによる〝発見〟という出来事は、まったく架空のものとなってしまう。それでは、何故に、そして誰によって、この出来事が創作されたのだろうか。さらに言えば、何故、今まで誰もがこの出来事を真実だと考えてきたのであろうか。そして、最大の疑問は、生存中から知られていたこの出来事に対して、何故シダルは、異議を唱えなかったのかということであろう。

第2節　モデル問題

このデヴァレルによるシダル'発見'の出来事には、この他にも様々な問題を含んでいる。しかし、ここでは死亡記事にも、当然とはいえ、記載されていないモデルの件をまず再考する事にしたい。

シダルがモデルをしたことは、確かであり、死亡記事に基づけば、絵を個人的に教えてもらうために、いわば交換条件の形でモデルをしたと見なすことも可能である。しかし、ここにも問題がある。第一に、個人的な授業を受けるためならば、何故デヴァレル、ハント、ミレーそしてロセッティという、4人もの画家のモデルをしなければならなかったのか、ということ。第二に、彼女が彼らのモデルとなっていた時期の作品は、現在のところ発見されていないためもあって、本当にその時期に絵の修業したか否かが、作品からは判断できないこと。第三に、彼女を教えたと記録しているのは、ブラウンとロセッティのみで、デヴァレルにも、ハントにも、ミレーにも認められないこと。第四に、そのブラウンが彼女を教えたとする時期は、1853年であること。第五に、デヴァレルの父親が感動するほどの素描を、モデルをする以前から描き得たか、ということ。そして第六に、婦人帽子屋の助手という仕事をしながら、モデル兼の絵画修業がはたして両立するか、ということである。

これらの問題点を解決するためにも、シダルがモデルをした作品との関係からこの問題を検討したい。

現在、シダルは、1850年の2月[20]には、デヴァレルの〈十二夜　Twelfth Night〉のモデルをしていたことが判明している。が、彼女が直ぐにモデルになったかどうかは曖昧のままである。この点に関してマッシュは、モデルの開始時を1850年の新年と推定している。その理由は、帽子屋の仕事を休むことなくモデルをするには、数日の休日があった新年の休暇が妥当、と考えられる[21]からである。とすれば、彼女はこの時点では、密かにモデルをするつもりであり、帽子屋の主人には知られたくなかったことになる。当然、助手を辞める気持ちは、なかったに違いない。

デヴァレルの〈十二夜〉のモデルは遅くとも2月には終わったが、シダルはまもなくハントの〈ドルイド教徒の迫害から逃れるキリスト教司祭を匿う改宗したイギリス人家族 A Converted British Family Sheltering a Christian Missonary from the Persecution of the Druids〉の少女のモデル、続いて同年夏、同じくハントの〈プロテウスからシルヴィアを救出するヴァレンティヌス Valentine Rescuring Sylvia from Proteus〉の貴婦人シルヴィアとしてポーズを取っている。さらに、暮れにはロセッティの〈デリア Delia〉とミレーの名高い〈オフィーリア Ophelia〉のモデルをすることになる。

このように、かなり頻繁にポーズを取っていることから考えても、彼女は帽子屋での仕事を辞めていた[22]と思われる。実際1851年4月の国勢調査によれば、彼女は両親の家で暮らしている21歳の女性となっているので、この時点では、親に扶養される無職の状態と判断されていたことになる。しかし、彼女は本当に無職の、従って無収入の状態でいられるほどの境遇であったのだろうか。しかも、この時期に絵の修業をも同時にしていたとすれば、かなりの出費を覚悟しなければならず、それだけの蓄えが帽子屋の助手に出来たのか、という疑問が起きる。この無職との国勢調査に関して、マッシュは、この国勢調査で専門のモデルとして登

録された女性は、ロンドンでわずかに二人であったことを指摘して、この当時モデルはほとんど職業として認知されていなかったと推定し、シダルはこの時期にはすでにモデルを職業としていた[23]と見なしている。しかし、1851年の4月時点では彼女が一般的には蔑まれた職業を自ら選ぶとは思われない。その理由の一つには、ハントが晩年になってではあるが、次のような一文を残したとされるからである。すなわち「ロセッティに口説かれた時、彼女は誰かと結婚する直前であった[24]。」このハントの回顧録の一文にある「ロセッティに口説かれた」の件は、ロセッティとの間での恋愛関係を示唆していると考えられるが、この回顧録でのシダルはロセッティ以外の誰かとの間で、真剣に結婚の話を進めていたことになる。とすれば、職業の選択には殊更に慎重であったに違いないからである。

彼女が必然的にモデルを職業としなければならなくなったのは、1851年の暮れ以降ではなかったか、と推定する。というのも、父親に代わって一家を支えていた長兄チャールズが年末に重病となり、翌1852年1月初旬に死去した[25]からである。次男のジェームズはこの時13歳でしかなかったので、唯一の稼ぎ手を失った一家は当然ながら困窮し、ためにシダルはこの時点でモデルを本格的に仕事として選んだのではないだろうか。いずれにしても、この時からラファエル前派の、そしてロセッティの美神としてのシダルが誕生することになった。

第3節　ロセッティとの関係　ロセッティのモデルとなるまで

これまで、ロセッティがシダルをモデルとして選び、そして恋に落ちたとされてきた。ところが、前出のシダルの死亡記事によれば、1852年末頃に、シダルがロセッティを絵の師として選んだ、とある。そこで、ロセッティ側の記述ではシダルはどのように扱われているのか、またそこにある問題点を考えてみたい。

まず、第一にロセッティがシダルを気にかけるようになった時期についてであるが、不思議なことに、デヴァレルが彼女を発見した時期のロセッティの手紙にも、あるいは弟の記録にも一切シダルの名前は出てこない。唯一ハントが、シダルの〝発見〟を告げに来たデヴァレルからの誘いを受けて、翌日、彼のアトリエにやって来たシダルに会いに行った時のロセッティについて、次のように書き残している。「ゲブリエルは時間がなくても困らなかった。シダル嬢の美しさについては少しも減少しなかった、しかも自分のためにモデルをしてくれるように説き伏せたと告げに翌朝やって来た。…ロセッティは、最初から賛美を漏らしていたとはいえ、彼女に対して丸1年か2年の間、いかなる強烈な個人的感情をも表明しなかった。[26]」このハントの記述とウィリアム・ロセッティの「エリザベス・シダルと恋に落ちることは、同然の成りゆきだった。そしてダンテ・ゲブリエルは、かなり早い時期に恋した――私は1850年迄に、彼らの関係はかなり進展したと思う[27]」という記述に基づけば、ロセッティは、彼女にデヴァレルとまったく同じように一目惚れしてしまったように見受けられる。特に、後者の記述は、シダルとロセッティが1850年には恋愛関係にあったことの証拠と考えられてきた。さらに、ウィリアムは、ロセッティが彼女をモデルとしたのは、1850年の秋に制作が開始された〈ロッソヴェスティータRossovestita〉と指摘[28]し、これがロセッティ一目惚れ説を補強する形となってきた。

しかし、現在に至るまで、1851年以前での彼らの親密な関係を語る他の資料は発見されていない[29]し、ウィリアム説には無理があるように思われる。というのも、そもそもロセッティは1850年の大半は両親の家で生活していたので、絵の制作もそこで行われていた。従って、もしシダルをモデルに使うとすれば、両親たちに知られることになる。と同時に、両親はこの時すでにシダルを見知っていたことになってしまう。ところが、そうした記録は残されていない。

ロセッティが初めて会った彼女に惹かれたとしても、それはモデルとしてではなかったと思われる。というのも、この時期彼は、〈主よ、我は主の下女なり Ecce Ancilla Domini〉の聖母のモデルとして'赤毛の女性'を探しているが、'赤毛'のシダルをモデルに求めることはなかった[30]からである。しかも、ウィリアムは1850年、〈十二夜〉に対する批評のなかで「彼女の顔は、ヴィオラとしての美しさを備えてはいない[31]」として、

彼女の容貌を貶しており、この記事は、彼ら兄弟の眼が当時モデルとしてのシダルには、向いていなかったことを暗示する。1850年のこの時点で、ロセッティのシダルに対する関心は、ハントとスティーヴンズが彼女に行った悪戯に対して、「ハントとスティーヴンズは、シダル嬢をハントの妻と通すことによって、哀れなジャック・タッパーに一杯食わせるという恥ずべきことをやってのけた[32]」と、憤慨した手紙によってのみ知られる。この出来事に対するロセッティの態度を、シダルに対する感情の表出、それとも、ヴィクトリア朝の紳士としての仲間の恥ずべき行為に対する怒り、と見なすかは判断が別れるところであろう。しかし、少なくとも、この短い文面から読み取れるのは、騙されたタッパーへの心遣いであって、ハントの妻とされたシダルに対する同情ではないことは明らかであろう。

シダルがロセッティのモデルとなったのは、早くとも1851年2月にデヴァレルがレッド・ライオン・スクェアーにアトリエを借り、そこにロセッティが同居してからか、あるいは、当時ロセッティが師と仰いでいたブラウンの家で1851年末に制作が開始された〈デリア〉以降のことではなかったであろうか。というのも、作品上で最初にシダルの姿を確認できるのは、1851年11月に第一習作が制作されたこの〈デリラ〉だからである。この最初の習作のモデルは、シダルではなく、当時ブラウンのモデルであると同時に恋人であり、後に妻となったエマ・ヒル（Emma Hill）であったが、次の段階で直ちにモデルは、シダルに変わり、年末12月には水彩画が完成している。

次に、ウィリアム・ロセッティによれば、多分1851年末までに、彼らは婚約したとある。がこの記事も不可思議である。というのも、ロセッティはシダルに自分以外の画家のモデルとなることを拒否させている[33]が、ミレーの〈オフィーリア〉の顔部分の油彩画が完成したのは、1852年5月6日のことであり、当時のミレーの常として、モデルを目の前にして油彩画を制作したと考えられるからである。彼らの密かな婚約が可能と思われるのは、1852年の夏にロセッティがハイゲイト・ウェスト・ヒルに小さな部屋をアトリエとして借りた時であろう。この時、シダルは、水彩画〈ダンテへの挨拶を拒否するベアトリーチェBeatrice Denying Dante Her Salutation〉のモデルとなっているからである。そして、この時期すなわち1852年8月まで、シダル自身の絵画作品は、現存していない。

こうしてみると、シダルの死亡記事に記載されたデヴァレル・シニア氏が「大変気に入った」とされる「暇なときに描いた数点のデッサン」とは、どのようなものであったのだろうか。息子のウォルターが1854年に腎不全で急死し、また、母親も1850年10月、シダル〝発見〟とされてきた出来事の直後に死亡しているので、シダルの死亡記事との関わりをも含めて、現在に至るまですべてが闇の中にある。

註

1　後述するように、彼女の父方の姓は、Siddall という、ダブルの〝l〟で綴られていたが、ロセッティは常にシングルの〝l〟で綴っていた。そのために、現在に至るまでエリザベス・シダルの姓は、特別な場合を除き、Siddalと綴られている。

2　Deborah Cherry及びGrselda Pollockは、シダルがSiddallという綴りからSiddalという綴りへ姓を変えたとき、ロセッティによって創られた別の人物へと変身した、として、「Siddal（という綴り）は記号として機能する」との観点からシダル像を考察している。Deborah Cherry & Grselda Pollock : Woman as Sign in PreRaphaelite Literature : A Study of the Representation of Elizabeth Siddall, Art History, vol. 7, No.2, June 1984, pp.206-227

3　長いこと、シダルは1834年生まれと考えられてきたが、1830年のセント・アンドリーズ教区教会の洗礼記録と、1851年4月の国勢調査に記載された21歳という記録から判断して、1829年説が浮上してきた。こうした年齢詐称は、勿論シダル自身が若く見られたくて行ったことと思われる。彼女と同様のことがブラウンの妻エマにも認められるからである。彼女はブラウンには1834年生まれと語っていたが、実際にはシダルと同じ1829年の生まれであったことが判明している。しかしながら、ラファエル前派の仲間

たちも、進んで彼女（たち）の偽りに荷担したと思われる。というのも、彼らのシダル（エマ）15歳説には、世の中の汚れに染まっていない、無知ではあるが純粋な少女を見出し教育するという、彼らヴィクトリア朝紳士の理想を実現する対象という意図が認められるからである。シダル1834年誕生説が広く流布し、信じられるようになった源は、やはりウィリアム・M. ロセッティの記事、特に1903年に出版されたWilliam M, Rossetti:Elizabeth Eleanor Siddall, Burlington Mag., May 1903, p.273の「エリザベス・エリナ・シダルはシェフィールドの刃物師の娘として1834年か、あるいはその頃に生まれた。私の兄は1828年の5月生まれなので、彼女は兄よりも6歳年下であった。」にあると思われる。1834年誕生はフリードマンにもドブス、カーリーにも認められる。William Fredeman : PreRaphaelitism, Cambridge, 1965, p.209, Brian & July Dobbs : Dante Gabriel Rossetti, An Alien Victorian, London, 1977, p.118, Elizabeth Lvther Cary : The Rossettis, London, nd. (reprinted 1974), p.70

4 シダル家の系譜が曖昧なままであることの理由の一つは、彼女が生前中ですら、ほとんどシダル家とロセッティ家のつき合いはなかったが、彼女が死亡した後は、まったく関係が途絶えたことによると思われる。これは、1903年において、ウィリアム・ロセッティが「私は（シダルの）父親がいつ死亡したのか知らない」と述べていることによっても明らかであろう。William M.Rossetti : op.,cit., p.273。また、ウィリアムの娘の記録から判断すると、どうやらシダルの末弟は知恵遅れであったらしく、ウィリアムはシダルの死後にも彼を援助していたらしい。長年にわたって彼が訪ねて来ていたことを家族にも言わなかったことは、ウィリアムにとって彼の存在が迷惑とは言わないまでも、知られたくないことであったと考えられる。Helen Rossetti Angeli : Dante Gabriel Rossetti, His Friends and Enemies, London, 1979, pp.197-8

5 Brian & July Dobbs : op., cit., p.85

6 Jan Marsh & Pamela Gerrish Nunn : Woman Artists and the Pre-Raphaelite Movement, London, 1989, p.65

7 家族構成についても、シダルは「7人兄弟姉妹の3番目」説も現存する。Jan Marsh & PamelaGerrish Nunn:op., cit., P.65。ウィリアム・M. ロセッティの記録では3男3女とある。William M, Rossetti : op., cit., p.273

8 ロセッティ家でさえ、父親のガブリエーレが病気となり、失明の危機に陥った1844年以降、長女のマリアはチャールズ・サイン卿の家政婦となって、家計の助けを行っているのである。

9 William M, Rossetti : op., cit., p.273

10 William M, Rossetti : op., cit., p.274

11 シダルは彼女の姉妹と同じようにdressmakerとなったという説もある。Jan Marsh & Pamela Gerrish Nunn : op., cit., p.56

12 Jan Marsh : Pre-Raphaelite Sisterhood, London, 1985, p.23

13 Hudson, D. ed. : Munby : Man of Two Worlds. The Life and Diaries of Arthur Munby 1828-1910, London, 1972, p.19

14 これまでは、ウィリアム・ロセッティの記録等から、15歳の少女と考えられてきた。しかし、実際には帽子屋の助手という仕事は、15歳の小娘に出来るような、生半可なものではなかったことは、デヴェレルやウィリアムならずとも、皆が知っていたはずである。

15 William M. Rossetti : op., cit., p.273

16 W. Holman Hunt : Pre-Raphaelitism and the Pre-Raphaelite Brotherhood, New York,,1905 (reprinted 1967), vol. 1, pp.198-9

17 F. G. Stephens : D.G. Rossetti, The portfolio monograph, no5, London, 1894, p.36なお訳文は、ラングラード：D. G. ロセッティ, 1990, p.55による。

18 これまでこの出来事は、Fredemanに代表されるように、大方は1849年の末説を採っているが、1850年の

ある春の宵の出来事とするDobbus説もある。E. Fredeman (ed.) : op., cit., pp.xx-xxi、Brian & July Dobbs : op., cit., pp.117-8

ハントの記述は、1849年から翌50年までの部分にいれられているだけで、明確な日付は記されていない。しかし、ウィリアム・ロセッティとF. G. スティーヴンズの記述には、1年以上の差があることに注目したい。こうした奇妙な話の一つとして、ブラウンの妻エマが、シダルと同じ帽子屋で働いていた、というラングラードの一文がある。Jaques de Langlade : Dante Gabriel Rossetti,Paris, 1985, p.88。この説に従えば、シダルは〝同僚〟であったエマを通じてラファエル前派の画家たちのことを知っていたはずであり、また同様に、デヴァレルも帽子屋に行く前からシダルの存在を知っていたことになる。エマは、帽子屋で働けるほどの知識やセンスも磨きようもないほど貧しい生活を子供時代から強いられてきたし、シダルが帽子屋で修業していた頃は子守をしていた。その後はブラウンのモデルをしているので、現在ではこの説は否定される。シダルとエマの母親同士が若い頃からの知り合いであったので、母親を通じて彼女たちも即知の間柄という説もある。Helen Rossetti Angeli:Dante Gabriel Rossetti, His Friends and Enemies, London, 1949, pp.187-8

ちなみに、現在では疑問符のつけられたデヴァレルによるシダル発見の出来事ではあるが、もし、シダルの死亡記事が誤りであったとしても、ここに記載したハントやウィリアム等の記事には、どう考えても不可思議な事が認められる。それは、デヴァレルの母親の行動である。なぜなら彼女には二人の娘がおり、通常仕事に就いていない娘たちは、母親のお供をして帽子屋に行くのを喜んでいたので、青年がお供をすることはまず考えられないからである。特に、この時期の彼は、自分の作品制作と同時に父親の画学校でアルバイトをもしていたので、多忙であり、母親も強いて彼に同行を頼むとも思われない。従って、通説とは逆に、彼のほうが母親に帽子屋への同行を求めたのではないだろうか。また、ウィリアム・ロセッティの記事の中で不自然なのは、帽子屋の主人から許可を取り付ければ、あかたも本人のシダルからの許可は必要ないというがごとくに彼女からの承諾部分が欠落していることである。主人に許可を求めることは、恥ずべきモデル行為を公にすることであり、軽率以外のなにものでもない。しかも、いかに当時労働階級の女性の地位が低かったとはいえ、画家のモデルをするか否かを決めるのは本人であり、例え同居していたメイド階級の女性でさえ、拒否することが出来たし、実際行われたことが判明している。従って、ここにも、シダルに対するロセッティ側の階級意識が垣間見える。

19 Jan Marsh & Pamela Gerrish Nunn : op., cit., p.66

20 W. E. Fredeman (ed.) : The Pre-Raphaelite Brotherhood Jounal, William Michael Rossetti's Diary of the Pre-Raphaelite Brotherhood, 1849-1853, Oxford, 1975, pp.xx-xxi

21 Jan Marsh : op., cit., p.24

22 ウィリアム・ロセッティによれば、1851年末以前と推定されるロセッティとの婚約と同時に助手を辞めた、とされる。William M, Rossetti : op., cit., p.277

23 Jan Marsh : op., cit., p.24

24 この記述はW. H. H and PRB typescript, Violet Hunt Papersにある。Jan Marsh : op., cit., p.27参照

25 ミレーがハントに語った（1852.1.9）ことによれば、「シダル嬢は（彼女の兄の死亡によって）2週間、誰のモデルをもできなくなった」とある。Tate Gallery : The Pre-Raphaelites, London, 1984, p.98

26 W. Holman Hunt:op., cit., vol. i, p.199

27 William M. Rossetti : op., cit., p.274

28 William M. Rossetti : op., cit., p.277による。なお、Virginia Surtees : Dante Gabriel Rossetti 1828-1882, Oxford, 1971, No.45にこの作品についての詳細な記述がある。しかし、作品から判断する限り、この水彩画の女性はシダルとは似ていないので、真偽のほどは明らかではない。

29 Jan Marsh : op., cit., p.28

もし事実がウィリアム・ロセッティ説通りなら、前述したハントの、シダルはロセッティに口説かれ

たとき、結婚直前という回顧録の話との間に又しても矛盾が生ずる。つまり、デヴァレル（と大方の研究者は考えている）か、あるいは知られざる他の誰かと結婚するつもりでありながら、ロセッティとも恋愛関係にあるという、二股をかけた女性ということになり、少なくともこれまで信じられてきたシダル像とは似ても似つかぬシダル像となってしまうからである。ハント説が偽りなのか、それともウィリアム・ロセッティ説が誤りなのであろうか。現在のところ、ここにも確かな判断基準は見出せない。

30 W. E. Fredeman (ed.) : op., cit.,1850年３月13日の記録参照。

31 The Critic : 1, 7, 1850

32 Osward Doughty & J. R. Wahl (eds.) : Letters of Dante Gabriel Rossetti, London, 1965-7, p.92
1850年9月3日の出来事とされる。この件に関して、ウィリアム・ロセッティの娘ヘレンは、シダルに対するロセッティの愛情の初出と認めている。Helen Rossetti Angeli : op., cit., p.187

33 ラファエル前派、特にロセッティと親しく、シダルがヘイスティングズで療養したときに親身になって世話をしたリー＝スミスは、「彼女（シダル）は勿論モデルであることを厳禁されている（二人のPRBたちだけではあるが）」と語っており、この件が仲間内では即知のことだったと判る。Jan Mzrsh & Pamela Gerrish Nunn : op., cit., p.66同様の表現は他にも認められる。Helen Rossetti Angeli : op., cit., p.187